加茂小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

長野市立加茂小学校

1　はじめに

加茂小学校は長野市の北西部に位置し、全校児童 192 名の学校である。学校は、河川の氾濫危険区域にも土砂災害警戒区域にも入っていないが、学区には土砂災害警戒区域がかかっている地域があることと、地震の災害も考えられるので、児童には災害に備え、考えて行動する力を育てる必要がある。本校は、一昨年度から今年度にかけて校舎の長寿命化工事が行われており、学校安全の体制づくりに配慮しなければならないことがあるため、今年度はできることを継続しつつ、工事完了後の体制づくりを中心に事業を活用した。

2　長野市立加茂小学校の防災体制について

避難訓練

○　4月 16 日(水)　第１回避難訓練

目的：南校舎からの火災を想定した基本的な避難経路の確認。中央消防署の方に立ちあっていただいた。職員の消化器訓練を実施した。

反省・今回は南校舎からの出火を想定したが、教室のあるプレハブ校舎から出火した場合は、外への出口がとても混雑することが考えられる。

・非常ベルが鳴らず、放送の音も小さかったので確認が必要だ。

・非常ベルが鳴ると子どもたちの緊張感が出る。

・「おはしも」をよく理解し、行動ができていた。

・消防署の方のお話を聞いて、赤帽子にする理由や避難する際の姿勢について学ぶことができた。

・朝の加茂タイムに時間を取って事前指導がしっかりできた。

・子どもたちの意識をしっかり向かわせるために、消防署の方のお話は時間を決めてお願いできるとよい。

○　5月 13 日(火)　第２回避難訓練

目的：休み時間における避難の仕方を確認

反省・集合場所で高学年が低学年に指示を出して並ばせていた。

・集合した児童は口にハンカチを当てていてよかった。

・静かに放送を聞き、冷静に行動することができていた。

・プレハブ校舎は非常ベルが鳴らなかったので、放送が入った時に少しざわついていた。

・保健室まで歩けない児童がいた場合、担架で運ぶ職員と、該当児童がいること

を本部にどのように連絡するかを決めておきたい。

・職員の避難報告が必要か検討したい。

○　12 月２日(火)　第３回避難訓練

目的：長野県北部を震源とした地震発生時における避難の仕方を確認

※これまでは年２回の避難訓練を実施してきたが、いずれも火災を想定した避難訓練だった。そのため、11 月下旬に新校舎への引っ越し完了に合わせて地震による災害を想定した避難訓練を実施し、新校舎からの避難の仕方を確認した。

反省・非常ベルが鳴ってすぐに机の下に避難してしまう児童がいたため、放送を最後まで聞いてから行動するように指導した。

・落ち着いて放送を聞き、避難していた。

・今回は避難しなかったが、「おはしも」をよく理解していた。

・机の脚が４本の児童はななめに持つことを事前に指導した。

・身体を丸めて机の脚をしっかり持ち、すぐに動けるようにお尻をつけず、膝をついて机の下に避難することを指導した。

・窓際の児童は、窓に頭を向けないように机の下に避難するように指導した。

・１・２学期のまとめとして、３学期は抜き打ちで避難訓練を行ってみるのもよい。

・学期に２回は避難訓練をしたい。

３　学校防災アドバイザーの関わり

今年度は校舎の長寿命化工事が完了した段階で、新校舎からの避難の仕方や、学校の防災体制に関しての支援をいただきたく、本事業を活用し、信州大学 榊原保志 特任教授に

避難訓練の様子を見ていただいた上で、御助言いただいた。

(1) 避難訓練の概要

日時：12 月２日(火)

想定：長野県北部を中心に震度５強の地震が発生

内容：校舎内からの避難経路の確認。基本的な態度（避難の鉄則６カ条）の確認。
机の下の避難の仕方の確認。
※今回は実際に校庭への避難はせずに、非常ベルと放送での指示の後、各教室で指導した。

(2) 信州大学 榊原保志　特任教授の助言から

ア　避難訓練に関するアドバイス

・避難訓練は子どもたちが自ら考えて行動し、自らの命を守れるように、また、職員が動けるように、様々な最悪の状況を想定して、短時間でも年に何回も訓練を行う。
・火災発生時は、初期消火と児童の安全確保に職員の役割を分担する。
・火災時にパニックで動けなくなる児童もいることから、避難訓練の際は部屋の中やロッカー、トイレをよく確認し、ドアにチョークで確認済の印をつけて確認が完了していることを明示する。
・火災が発生しやすい家庭科室や理科室で、実際にガス栓を閉めたり、薬品をしまったりして職員への周知を図る。
・地震発生時は校庭が地割れすることも考えられるので、安全確認をした上で、避難指示を出す。
・小学校は避難所になるので、第一地区と合同で避難所開設の訓練をする。

イ　防災学習に関するアドバイス

・防災学習は１～６年生で行う必要があるため、カリキュラム化する。

ウ　防災体制に関するアドバイス

・火災発生時の様子を教員が知るために、職員の煙霧体験を研修に取り入れる。
・職員が臨機応変に動けるように、年度初めに細かく分担を計画しておく。
・避難経路は文字と併せて地図をつける。
・防災マニュアルを定期的に確認しておく。

４　事業の成果とまとめ

今年度、校舎の長寿命化工事が完了し、教室の引っ越しを終えた段階で、榊原先生に避難訓練に立ち会っていただいて指導・助言をいただいたことで、今後、具体的に取り組むべきことが明確になったのでよかった。生活科や総合的な学習の時間と関連させた、子どもたちの防災教育の充実、学校での防災体制の見直しなど、様々な状況で職員や子どもたちが確実に安全に動けるようにしたい。また、地域の方や近隣の学校と連携しながら防災訓練や防災教育ができるように考えていきたい。

（文責　教諭　大原　都惠）

緑ヶ丘小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

長野市立緑ヶ丘小学校

1　はじめに

本校は、芹田・南部・古牧の各地域の規模適正化のため平成４年に開校された学校であり、現在 517 名の児童が在籍している。長野市の北東部に位置し、住宅地に囲まれた環境の中で地域と密接に関わりながら教育活動を行っている。学校の教育目標である「人や自然に愛される子」という理念のもと、「思いやる心を持つ」、「自然や社会に親しみ、進んで学ぶ」、「豊かな感性を育む」といった力の育成を目指し、自然とのふれあいや、学び合い・考え合いを大切にした教育が特徴である。

長野市が作成したハザードマップによると、学校近辺が市街地の低地であるため、大雨・台風時に道路の冠水や雨水の停滞が起こりやすい地域である。また、長野市周辺は地震発生の可能性が高い地域で、歴史的にも大きな地震（例：善光寺地震など）が発生した記録があるため、防災教育、児童自身が自分の命を守る意識を高めるための教育が喫緊の課題となっている。

2　長野市立緑ヶ丘小学校の防災体制について

(1) 火災及び地震発生を想定した避難訓練を年３回実施している。

ア　４月

・授業時間中に火災が起きた想定の基本的な避難経路の確認

・野外の集合場所の確認

イ　９月

・授業時間中に地震が起きた想定の避難

・緊急地震速報を流し、校庭への避難

（地震による放送機器の故障を想定し、口頭での指示伝達を行う）

ウ　11 月

・休み時間に火災が起きた想定の避難（児童に事前通告はしない）

・行方不明者の捜索訓練

(2) 地震を想定し、ＬＩＮＥワークスやメール配信システムを利用した保護者連絡と児童引渡し訓練を年１回（５月）実施している。

ア　引渡しカードの活用

全校児童全員分のカードを作成し、通学路図とともに非常持ち出し品として職員室に常備している。

イ　保護者には各教室まで迎えに来てもらい、各担任により引渡しを行う。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザー要請にあたり

日本各所で地震や水害などの大災害が起こっている現在、今までの避難の仕方や校内の安全環境整備が十分であるのかという懸念があり、併せて教職員の防災意識、危機管理意識を高めていくことも必要である。そのため、学校防災アドバイザーにより専門的な見地からアドバイスを頂いた。

(2) 学校防災アドバイザーからの御指導（信州大学教育学部　廣内大助先生）

ア　教師の管理下にない休み時間での避難訓練は、児童が自分で考え、行動しなければならないためとてもよい。その際に待機場所を作ることで混乱を最小限にできるが、逃げることを最優先に考えなければならないため、状況に応じて活用方法を考える。

イ　同じ内容の訓練では、マンネリ化し、様々な状況下での対応力が身に付かない。放送機器の故障や、倒壊等により避難経路が使えない等のイレギュラーな想定で行なうことが大切である。

ウ　緊急時の集合場所では、頭を守る姿勢をとることをイラスト等で視覚的に示す。

エ　緊急時に一時的に駐車場として使わせてもらえる場所（近隣にある大型店舗の駐車場等）を考えておく。

4　事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

今回の御指導を受けて、避難訓練では放送機器が使えないときの避難指示の伝達・避難の仕方の訓練を８月（授業時間の避難）と 11 月（休み時間の避難）に行った。

11 月に行った休み時間における抜き打ち訓練では、避難時に職員が近くにいなかったため、校内の緊急時集合場所に留まってしまう児童が複数名おり、その児童たちは校庭に集合できなかった。よって、避難訓練と同時に行方不明者の捜索訓練も行うこととなり、結果的に職員の緊急時における臨機応変な対応への意識を高めることに繋がった。

廣内先生の御指導を受けて行った今年度の訓練を通して、放送が使えないときに災害が起こり得ること、その場合の行動について考えることができ、職員、児童の災害への防災意識が高まった。

(2) 今後の課題

ア　緊急避難時に、教師がいない状況下でも児童が自分で対応できるよう、避難訓練等を通した防災教育を行っていく。

イ　ショート訓練を計画的に行い、児童の防災に対して意識が高まるようにする。

ウ　火災や地震などの想定に変化を持たせ、様々な状況を想定して、避難訓練を計画実践していく。

5　まとめ

学校防災アドバイザーの支援を受けたことで、防災安全教育について新しい視点で考えることができた。いつ起こるかわからない災害に対して防災教育、防災管理の必要性を自分のこととして受け止められるよう、教職員や児童、保護者に働きかけていくことが大切である。今後も災害時に実際に機能する防災体制を整えていきたい。

（文責　教諭　清水　宗太郎）

学校安全総合支援事業の取組について

―学校防災アドバイザー派遣・活用事業―

長野市立吉田小学校

1　はじめに

吉田地区は、かつての北国街道の宿場町として栄えており、周辺にはＪＲ北長野駅や長野電鉄信濃吉田駅があり、ＳＢＣ通りが通っている。吉田小学校は、各学年３～４学級、特別支援学級７学級の全 27 学級、全校児童数 625 名（令和７年 12 月１日現在）の大規模校である。

市内の小学校では２校だけの「肢体不自由学級」を有しており、南校舎及び体育館棟にはエレベーター、全てのフロアに多目的トイレが設置されるなどバリアフリーの環境が整っている。万が一の大きな地震や火災発生時に備え、車椅子や歩行のための補助装具を装着した児童の避難については十分に配慮し、経路や職員分担、対応など細かい部分まで共通理解を図っている。しかし、敷地のすぐ横を浅川が流れ、学校の敷地全体が 0.5m～３ｍの浸水危険地域に位置している。万が一の水害等に備えて児童や保護者、また、地域と連携して防災の取組を行い、意識を高めるための教育が喫緊の課題となっている。

2　吉田小学校の防災体制について

(1) 運営の方針

校内生活及び校外生活において、災害や不審者からの安全確保について、自分ばかりでなく、他の人の安全にも留意をして生活できる児童の育成を目指して、指導の徹底を図るとともに、施設・設備の安全管理に十分留意し、事故のないようにする。

(2) 安全対策

ア　年度当初に行うこと

・防護団組織づくり、各教室への防犯ブザー・護身棒配布、避難経路図の作成掲示、安全マップの配布や掲示、危機管理マニュアルの見直し・作成と職員への配布

イ　定期的・継続的に行うこと

・校舎内外の安全点検（毎月１回の一斉安全点検）
・遊具及び敷地内点検（教頭や体育係が行う）
・消火器、防火扉、火災報知器、緊急火災・地震放送設備、ガス感知器等の点検
・昇降口の扉閉め　・渡り廊下の防雪、凍結対策　・暖房器具の管理
・学区内の危険箇所の点検（交通安全と不審者の面から）

ウ　避難訓練・防災学習

・４月 10 日（木）「第１回避難訓練」

※地震による火災を想定。基本的な避難経路の確認を目的とした訓練。

・５月９日（金）「集団下校訓練」

※台風接近や有害獣からの危険を回避する等の場合に行う地区ごとの班で集団下校をする訓練。

・６月 12 日（木）「第２回避難訓練」

※休み時間に火災が起きた場合を想定。様々な場所にある緊急時避難場所から、担当職員や６年生誘導で避難する訓練。

・９月３日（水）「防災学習」

※長野地方気象台の方を招き、地震発生時の避難方法、日頃からの心構えを学習。

・９月 20 日（土）「引渡し訓練」

※大きな災害を想定した３年に１度の引渡し訓練。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 本校の引渡し訓練の計画に対する指導・助言

本年度は、３年に１度の引渡し訓練の実施年であり、前回の訓練を覚えているのは、４年生以上の子ども達、一部の職員であった。そのため、引渡し訓練前に、学校防災アドバイザーの信州大学の内山先生にお越しいただき、引渡し訓練の計画・立案について指導・助言をいただき、教職員・児童・保護者の動きを確認するとともに課題を洗い出し、より実践的な取組にしようと考えた。

ア　いただいた主な指導・助言

・保護者が自動車から降りずに引き渡す方式は時間がかかる。教室で引き渡した方がスムーズに実施できる。

・自動車を使った引渡しは、大雨になる前に行う。第２段階として引き渡せなかった児童を東部中に教員引率で避難させる。

・引渡しを判断する基準があるとよい。浅川の水位が○メートル、雨量○ミリになったら引渡しを判断するなど。

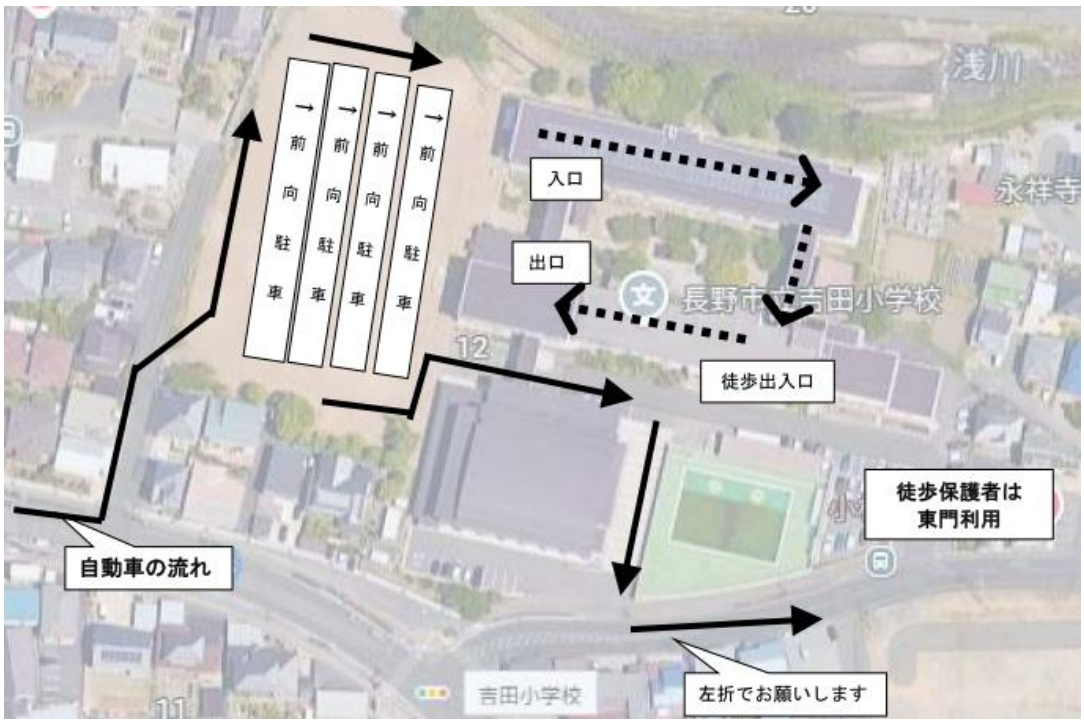
・「→」の紙をラミネートしてイスに貼って、校庭や校舎内に置く。校内を一方通行にして、保護者はその指示に従って動けるようにする。

・来年度以降については、「自動車を校庭に停める」→「保護者が校舎内で引き取る」という流れは変えない。災害、不審者など想定を変えればよい。不審者の場合は教室引渡しでもよいし、体育館に児童を集めてそこで引渡しでもよいが、必ず担任が引き渡すようにする。不審者想定の場合、専科などは戸締りを確認し、保護者かどうかの確認も行えるとよい。

(2) 引渡し訓練の参観と指導・助言

(1)でいただいた指導・助言をもとに計画を再度立案し、９月 20 日（土）水害を想定した引渡し訓練を実施した。その様子を学校防災アドバイザーに見ていただいた。また、訓練終了後、よかった点や今後に生かす点について指導・助言をいただいた。

指導・助言を受け、再度計画した引渡し時の流れ



全校児童・保護者による引渡し訓練の様子

校内を一方通行にしたことにより、整然と引渡し訓練ができた

コーンや矢印を表示することで人員配置を極力減らす工夫を行った

ア　いただいた主な指導・助言

・工事用の大きめの黄色いコーンは視認性が高く有効。小さめのコーンだけでなく、パイプ椅子など高さのあるものを併用すると、車からも見えやすく効果的。

・階段付近に立つ先生は看板で代替可能な場合もあり、教室内対応を優先するべき。外回りは地域の協力を得ることで、教員の負担軽減が可能。

・雨天時の対応として、傘や屋外靴は、混雑を避けるために校舎内に持ち込んでもよい。カッパは箱などに収納しておくとよい。他校でも靴のまま入室している例があ

り、緊急時は柔軟な対応が望ましい。

・子どもの待機方法として、学年によって待機方法を変えるのが有効。向かい合わせに座る、動画を見せる、合唱するなど、状況に応じた工夫が必要。保護者が来た時に分かりやすいように、最低限の声が聞こえる状態を保つ。

・訓練を毎年実施することで、教職員が変わっても保護者が対応できる。今回の訓練をベースに、３年間を一つのまとめとして訓練計画を作成し、次年度以降も継続・改善していくことが重要。

・洪水などの緊急時は、準備が整っていなくても即時対応が求められる。最低限「引渡しカード」などの準備が整っていることが重要。初動対応ができる準備を。

イ　職員の反省より

前日準備について

・当日の動きを実際に準備としてやってみたことで、具体的な見通しが持てた。

当日の職員の動き

・外での保護者誘導は、１時間くらいで交代がよい。外の担当者は帽子やカッパ、水分が必要。

・保護者の誘導よりも児童の安全確保や災害時にパニックになってしまう児童の対応に職員を割けるようにしたい。

当日の保護者の動き

・学年の引渡し時刻の設定にだいぶ余裕があったので、30 分間隔ではなく 15 分間隔でもよい。

・保護者に対面できるよう、南校舎は引渡しを教室後ろのドアでするのはどうか。

→訓練を重ね、保護者の方が方法を理解できるよう、設定を変えて、毎年の引渡し訓練を行っていくようにしたい。

当日の子どもの様子

・待ち時間が長く、飽きて、落ち着かない様子があった。

・トイレに行くときの一方通行を守った方がよいか戸惑った。

・各クラス 10 名くらいになったら学年で児童をまとめ、フリーで動ける職員を確保していくのが良いと思った。

４　事業の成果と今後の課題

○本校が３年に１度実施することとしていた引渡し訓練について、毎年継続して取り組んでいく必要性を強く感じた。やってみての課題を次年度に生かしていきたい。

○今回、各地区の区長さんに声がけを行い、参加可能な方に引渡し訓練の様子を見ていただいた。学校での様子を知っていただくことができたので、今後は、地域と連携した防災訓練や防災学習を行えるような方法を考えていきたい。

５　まとめ

今回、学校防災アドバイザーの内山先生に指導・助言をいただいたことで、視野が広がり、当初の計画を見直しながら万が一の際に備える心構えや準備ができた。継続した取組を行っていきたい。

（文責　教頭　両角　宏和）

朝陽小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

長野市立朝陽小学校

1　はじめに

朝陽小学校は、全校児童数549名、長野市東北部の住宅街に位置している。学校は車通りの多い県道に接しており、現在、その県道の拡幅工事と大規模な校地拡張工事が同時に行われている状況である。

校区には、想定浸水深３m以上の地域や家屋倒壊等氾濫想定区域に指定されている地域を含む。また、狭い道路や住宅が密集しているため、災害発生時には避難が困難になり、被害が大きくなることが予想される地域である。そのため、地域の実態に合わせた防災教育が求められる。

2　長野市立朝陽小学校の防災体制について

毎年、火災・地震を想定した避難訓練を年２回、保護者引渡し訓練（１年生）、集団下校訓練をそれぞれ年１回実施してきた。しかし、訓練の形骸化が課題であるとの声があり検討を重ねてきた結果、今年度は、保護者引渡し訓練を全校で実施したり、簡略化していた集団下校訓練をコロナ禍以前の形（全校児童が校庭に集合し、登校班ごとに下校する）に戻したり、休み時間の避難訓練を新たに実施したりするなど、改善を加えることができた。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学習のはじまり

昨年度、新規採用だった野池教諭は、初めて担任した４年３組で、防災教育の授業公開を行った。野池教諭から、防災教育に力を入れていきたいという願いを聞き、今年度、本事業に参加することを決めた。今年度は、地域と関わりながら防災教育を進めていきたいと考えスタートした。

(2) 事前打合せ

夏休みに、信州大学教育学部の内山琴絵先生と打ち合わせを行った。野池教諭が、今年度担任している５年２組の子どもたちとつくっていきたい防災教育への願いを共有したところ、信州大学

で開発した防災教育用アプリ「フィールドオン」を活用し、子どもたちが実際に地域を散策しながら危険箇所を入力して防災マップにまとめる活動を紹介いただいた。地域との関わりを大切にしたいという野池教諭の願いから、「フィールドオン」を用いたフィールドワークでは、地域の方々に協力をいただくこととした。

(3) アプリを使ってみる

信州大学防災教育センターの倉澤さんから、「フィールドオン」の使い方を教えていただく。５年２組の子どもたちは、日頃からタブレットをよく使っているため、このアプリにもすぐに慣れ、スムーズに使うことができるようになった。

(4) フィールドワークの実施

10 月、５年２組は、地域の方々や内山先生を始め信大生、合わせて 20 名程に協力をいただいて、学区内を８つの地区に分かれて歩き、災害時危険になるところを探して「フィールドオン」を使って記録した。子どもたちは、過去に発生した災害の話などを聞き、災害を身近に感じることができた。

(5) 休み時間避難訓練の実施

コロナ禍の間に行っていなかった、休み時間の避難訓練を６月に実施。休み時間に放送が入り、校内のあちこちで遊んでいた子どもたちが、決められている集合場所に集まる訓練を行った。実施後の振り返りの中で、集合場所から校庭に避難するまでの訓練も必要であるという声が上がったため、11 月に係の計画で２回目の休み時間避難訓練を実施することとした。２回目は、子どもたちに日時を明かさずに実施した。内山先生に来校いただき、６月の訓練での子どもたちの様子を伝え、実際に子どもたちの集合場所での様子や職員の動き、避難の様子を見ていただいた。実施後、内山先生と「実際に出火したら…」という視点で訓練を振り返り、残留児童の確認をする職員は戻ることができないから一度で正確に確認するにはどうしたらよいか、当日の遅刻者・早退者をどう把握するかなど、たくさんの指導・課題をいただいた。

(6) 防災マップを活用したシミュレーション

野池教諭は、フィールドワークを通して子どもたちが作成した防災マップを使い、災害時の避難をシミュレーションする授業を行った。内山先生に参観いただき、指導をいただいた。子どもたちは、自分の考えた避難行動について、その行動の意味も説明することができていた。

４　事業の成果及び今後の課題

今年度、本事業に参加したことで、本校の防災教育に変化が起こり、今年一年で防災に関する意識が高まったと感じる。今回の実践を通して、地域の方とのつながりも強まった。今回、子どもたちと一緒にフィールドワークに行ってもらえる地域の方を募ったところ、予想以上に多くの方に参加いただけることになり、各グループ２～３人の大人がついて地域を回ることができた。当日は、色々なところで立ち止まり、地域の方から歴史なども説明いただいた。子どもたちも、地域の方に教わりたいと質問を準備して臨むなど、積極的に関わる姿が見られた。

今後は、今年度の実践を発展させながら続けていくこと、他学年・他学級へ広めていくことが課題である。今年度の４年２組では、防災教育で本校にある備蓄倉庫について考え、「本校は避難所になるのに防災スリッパがない」と気づいたことをきっかけに、新聞紙で防災スリッパを作成した。今後も、子どもたちの気づきを大切に、防災教育を積極的に行っていきたい。

また、避難訓練で御指導いただいたことを、今後の実践に生かしていくことも本校の大きな課題である。学校全体でしっかりと共有していきたい。

５　まとめ

普段なかなか意欲的に学習に取り組むことが難しい児童が、今回の防災学習に積極的に取り組む姿が見られた。自分たちが作った防災マップを使いながら避難シミュレーションをしたときには、自分が担当した地区（その子の住んでいる地域ではない）の危険箇所について堂々と説明し、より安全に避難できるルートを見つけ出そうと真剣に考えていた。今後もこのような意欲的な姿を大事にしながら、学習を発展させていくことができるとよいと思う。そのきっかけをいただいた内山先生に心から感謝したい。

休み時間の避難訓練など、これまで行わなければならないと感じていながら、なかなか踏み出すことができなかったことに、今年度は挑戦することができた。実施に向けては、職員がよりよいものにしようと真剣に話し合うことができた。

本事業に参加したことで、たくさんの人、もの、機会と出合わせていただいたことに感謝したい。

（文責　教頭　沖　美鈴）

長沼小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

長野市立長沼小学校

1　はじめに

長沼小学校は長野市の東北部に位置し、東の方角には千曲川が流れている。令和７年度の児童数は 71 名で、全学年単級の小規模校である。長沼地区は南北に長く、その中央を国道 18 号線が通り、西の端は長野新幹線が通っている。学校は国道の西側に位置し、広々とした水田やリンゴ畑の中にあり、自然に恵まれたところである。

長沼地区は、令和元年の台風 19 号の大雨による千曲川の堤防決壊のため、大規模な浸水被害を受けた。本校も教室１階部分が約 1.7mまで浸水し、学校が復旧するまで、柳原小学校の教室を間借して、授業や活動をしていた。本校に通う児童の中にも浸水等の被害を受けた家庭があり、被災後、避難所や仮設住宅での生活、避難場所からの車やバスでの通学、その後のコロナウイルスの流行など、制限された中で学校生活を送っていた。令和２年度に校舎が復旧し、令和３年度には通常登校（徒歩通学）もできるようになった。

学校の復旧とともに、敷地内に長沼児童センター・長沼保育園が新たに開設され、長沼学校園として地域が活性化することが期待されている。

2　長野市立長沼小学校の防災体制について（概要）

本校では、年２回の避難訓練と年１回の引渡し訓練があり、今年度は保育園職員と防災訓練の研修も実施した。５年前より、台風 19 号が起きた 10 月 13 日に『長沼防災の日』を設定し、『発表・発信』（各学年や全校で防災について学習したこと）、『訓練』（水害を想定した避難の実体験）、『連携』（地域の方との交流を活かした防災への意識の向上）の３つをローテーション化し、児童が本校在籍中に２回経験できるようなカリキュラムをつくるとともに、各学年で年齢や教科の学習に応じた防災学習も実施している。

台風 19 号の被害後、災害の大きさや実際の被害を考慮し危機管理マニュアルの見直しを行い、令和５年度には水害を想定した長沼小タイムラインの作成を行った。成長段階に応じた防災学習が行えるよう、令和６年度には長沼小防災教育カリキュラムを作成した。水害とともに歴史を歩んできた長沼の地に住む子ども達が、過去の災害を知ることや地域や自分達を守るための防災について学ぶことを大切にしてほしいと考えている。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 保育園と同日開催の引渡し訓練と職員研修

ア　ねらい　　保育園と同時刻に引渡し（災害時は保育園と同日に引渡しが行われると想定し）を行うため、連絡方法や引渡しの手順を考えた計画にする。

緊急時に混乱せず、間違いなく児童を保護者に引き渡せるようにする。

イ　想定　　長雨・大雨により、流域警戒ステージ４（警戒レベル２）に達したため、児童の引渡しを行う。

ウ　実施内容　放送を聞き、児童は避難（下校）の準備をして体育館に集まる。
職員は、保育園→小学校の順で引渡しに来る保護者の誘導と、児童の引渡しを行う。
→引渡し訓練後、廣内先生による保小合同での職員研修を行う。

＝廣内先生によるご指導＝

・災害が起きて子ども達は不安な気持ちでいるので、黙って静かに待つことを強いるよりも、不安な気持ちを減らして楽しく待てる時間にした方がよい。

・今回保育園と一緒に引渡し訓練を実際にしたことで、計画では気づかなかった改善点が見えてくる。毎年訓練をしながらその改善点を修正していけばよい。

・防災についての対策は、どれだけ計画をしても完璧ということはない。計画を完璧にするよりも、緊急な事態に対してどれだけ臨機応変に対応をすることができるかの実践力が大切になる。

エ　その後の対応

実際に訓練をして改善した方がいいと感じたところは、今年度の段階で修正をしておき、次年度の係に引き継ぐ。

全ての対応について、名前を入れて分担を細かく決めてしまうのではなく、その場で柔軟に変更や対応ができるような計画にしておく。

(2) 第２回避難訓練

ア　ねらい　　休み時間に地震が起きた際の避難の仕方を知る。
消火器の使い方を知り、学校や家に設置されている消火器が緊急時に使えることを知る。

イ　想定　　休み時間に地震が発生。その後火災が起きたため、体育館に避難をする。

ウ　実施内容　休み時間に警報と放送を聞いて、児童は体育館に避難する。
職員が各学年の点呼と、消防の係活動を行う。
消防署職員からの御講評と消火器の使い方の説明を聞く。

＝廣内先生によるご指導＝

・計画と違うこと、その場で判断をしなくてはいけないことが起きた際に、『どう対応していくことができるか』が大切である。

・今回は決まっていた形の避難だったので、職員にとっても訓練になるように工夫をしていけるとよい（人が足りない、けがをしている、日時を伝えないなど）。
・２年または３年を１つのサイクルとして、異なる訓練を入れていくようにするとよい。そして、計画した内容を、その後の係や職員にも引き継いでいけるようにすることが大切である。

エ　その後の対応

廣内先生よりいただいた見本を参考にして、訓練や防災の日の内容を、全て３年周期で回していけるように計画をした。（下図）

それぞれの訓練の実施計画にも、３年分の計画と本年度がどの内容の年になるのか明記する項目を入れた。

避難訓練ローテーション（3ヶ年計画）

長沼小学校

	4月	5月	未定(行事を考慮し)	9月	10月
1年目 (R7)	**通常訓練** ・火災 ・教室 ・授業中 ・集団下校隊形練習 (避難後地区毎に並ぶ)	**引き渡し訓練** ・水害 ・教室 ・授業中(帰りの会) ※北レクに避難の年は、長沼防災の日に北レクへお迎えの形で行う。	**防犯訓練** (職員研修) ・教室(特別教室) ・授業中での設定	**2回目訓練** ・地震→火災 ・休み時間 ・それぞれの場所で	**長沼防災の日** ・水平避難 ・避難場所 穂保高台避難公園 ※次の水平避難の際には北レクに避難を行う
2年目 (R8)	**通常訓練** ・火災 ・教室 ・授業中 ・集団下校隊形練習	**引き渡し訓練** ・水害 ・教室 ・授業中(帰りの会)	**防犯訓練** (職員研修) ・教室(特別教室) ・授業中での設定	**2回目訓練** ・地震→倒壊のおそれ ・特別教室等 ・それぞれの場所で	**長沼防災の日** ・防災に関する体験 ・長沼小にて ・地域の方も参加
3年目 (R9)	**通常訓練** ・火災 ・教室 ・授業中 ・集団下校隊形練習	**引き渡し訓練** ・不審者 ・体育館 ・授業中(帰りの会)	**防犯訓練** (児童とともに) ・安全な場所の確保 ・授業中	**2回目訓練** ・地震→火災 ・時間を伝えずに ・それぞれの場所で	**長沼防災の日** ・学習発表会 ・長沼小にて ・学年ごとの発表

※①水平避難②防災に関する体験③学習発表をローテーションで行う。

(3) 長沼防災の日（水平避難）

ア　ねらい　　学校から水平避難を行う際、落ち着いて安全に避難ができるよう、全校で実際に避難場所に避難を行う。

高台避難公園について４年生の説明を聞き、学校や自宅の近くに避難できる場所があり、避難設備が備わっていることを知る。

イ　想定　　大雨により、流域警戒ステージ４の水位に近づいたため、近隣の高台避難公園に全校で水平避難をする。

ウ　実施内容　放送を聞き、避難の準備をして昇降口に集まる。全校で公園まで水平避難を行う。公園の施設や倉庫の中身の説明を４年生から聞く。

縦割り班ごとに帰りのルートを任せる。

＝内山の先生によるご指導＝

・今回は、児童が避難をする段階からの避難訓練であったが、タイムラインに合わせて職員がどのように対応すればよいのか実際に動いてみることも大切。水平避難の避難訓練は、児童よりも職員にとっての訓練や確認の場として、重要視していくとよい。

・水平避難は、立地や児童数に合わせて方法を考えることが大事。現在は、全校で避難するための土台を作っていく時期である。

・晴れの日だけでなく、雨の日の訓練も行い、どの場面でどのくらいの時間がかかるのか、どんな対応が必要になるのか試していくと、よりよいタイムラインの作成ができる。

エ　その後の対応

高台公園について発表を聞いて、全校から出てきた更に調べたいことについて、学年で引き続き学習を行った。

様々な条件を試し、実際に職員が動けるタイムラインの見直しを計画している。

３年後や６年後の係が水平避難を行う際の資料として提供できるよう、今回の水平避難の方法や時間、職員の動きなどをファイル等に保存している。

4　事業の成果及び今後の課題

今年度、アドバイザーから御指導をいただくことで、今まで気づかなかったことや知らないでいたことを学ぶことができた。長沼学校園として保育園や児童センターと合同の防災訓練や、実際の災害時において柔軟に対応するための多様な想定での防災訓練の必要性、そして水平避難でタイムラインに沿って実際に動いてみることの重要性を感じた。

現在、災害時に長沼小学校にいた職員や、被災時の様子を知る職員はわずかである。毎年職員が入れ替わる中、『今年度の職員が感じた思いを理解して学習や訓練を計画立てることができるのか、台風 19 号災害について災害の大きさや復旧の大変さをどれだけ伝えていくことができるのか』、それらのことが今後の課題になるだろう。

5　まとめ

６年前に水害被害にあった土地であり、昔から水害に遭いながらもそれを乗り越えてきた歴史がある長沼であるからこそ、防災について学んだり考えたりすることに大きな意味を感じる。ただ、今後入学する児童は災害後に生まれた子ども達である。被災の経験がない子ども達には、現在の子ども達とは違う防災学習が必要と感じる。

（ 文責　防災係　下平　昌美 ）

学校安全総合支援事業の取組について

―　岡田川の氾濫を想定した「マイ・タイムライン」作成の取組について　―

長野市立共和小学校

1　はじめに

長野市南部に位置する共和小学校は、創立 152 周年を迎え、児童数男子 147 名・女子 141 名、計 288 名の小学校である。現在の校舎は、旧校舎から約 300 メートル東にある篠ノ井小松原に新築移転してから、今年で 20 年目を迎える。

移転後の令和元年には、台風 19 号による河川の氾濫などの災害により、体育館に避難所を２日間開設し、46 家庭・約 120 名が避難した。校舎自体に被害はなかったものの、台風の強風により、東西の校門に立っていたポプラの木４本のうち２本が倒れる被害があった。

その後は、災害による大きな被害はなく現在に至っている。

2　長野市立共和小学校の防災体制について

(1) 共和小学校と共和地区(学区)の災害・防災の特性

共和小学校の周辺には、りんご畑や田んぼが広がっており、民家との距離も比較的離れている。共和地区は、大きく分けて「今井原地区」「岡田地区」「犀口周辺地区」の３つに分かれているが、防災の観点から最も重要なのは、これらの地区に隣接する河川の氾濫への備えである。

(2) 共和小学校の防災安全計画

月に１回の点検項目に従った安全点検、年３回の想定別避難訓練を実施している。

・垂直避難訓練　　４月「移動の仕方を実際に歩いて確認、避難する教室の確認」
・第１回避難訓練　４月「地震・火災の想定、各教室からの教師の指示で避難、経路の確認、校庭での人員確認、職員の係の確認」
・第２回避難訓練　９月「休み時間の火災の想定、子ども達が判断して避難場所に集まり避難、校庭での人員確認、地域消防団参加」

「長野市洪水・土砂災害ハザードマップ」で、共和小学校の西側約 400 メートルに位置する岡田川が氾濫した場合、約 0.5 メートルの浸水被害が想定されている。こうしたリスクに備え、令和６年度より「垂直避難訓練」を実施している。

(3) 避難所としての役割

台風 19 号による河川の氾濫などの災害により、体育館に避難所を２日間開設した事から、年度当初（４月）に全職員で、体育館にある備蓄品の場所を確認した。

3　学校防災アドバイザーの関わり

共和小学校の防災における重点は、岡田川の氾濫対策である。今回の「学校安全総合支援事業」では、４年１組の子ども達が社会科の「地域の防災を学ぶ」単元の中で、岡田川の氾濫を想定した「マイ・タイムライン」を作成することにした。

そこで、子ども達が自然な流れで学習を進められるように学習計画を立て、防災アドバイザーの方々には、適切な場面で御指導(授業)をしていただいた。

(1) 御協力いただいた学校防災アドバイザー・御指導内容

長野地方気象台　　渡辺 記秀　様　(気象台の役割や近年の気象の様子等)
千曲川河川事務所　齋藤 義喜　様　(河川事務所の役割や河川の災害の実態等)
信 州 大 学　　本間 喜子　様　(災害の知識やマイ・タイムライン作成方法)

(2) 学習の流れと学習内容

社会科　単元名「自然災害からくらしを守る」
～岡田川の氾濫を想定した「マイ・タイムライン」作成しよう～　（９時間扱い）

・第１時　（９月１日　２校時)

長野県で起こった災害について調べる中で、災害に対する自分の考えを深めたり、興味や関心を持ったりすることができた。

・第２、３時　（９月８日　１～２校時)

長野気象台の渡辺記秀様からお話を伺い、気象台の仕事や防災における役割、気候の変化により災害が起こりやすくなってきていること、そして身近な地域で発生した台風 19 号による風水害について知ることができた。

・第４時　（９月 12 日　２校時)

河川事務所の齋藤義喜様からお話を伺い、河川事務所の仕事や風水害に備えた取組、自分達の地区ではハザードマップをもとにどのように防災計画を立てればよいかなどについて知ることができた。また、防災カードゲームも楽しんだ。

・第５時　（９月 17 日　３校時）

自分の住む地域で防災にどのように取り組んでいるかを調べて発表し合い、それぞれの地域に自主防災組織があり、防災訓練が行われていることを知った。

・第６時　（９月 19 日　２校時）

自分達の家族の取組や、災害に備えて準備しているもの、家の中の対策、避難場所、家族との約束など、それぞれの家庭で聞いてきたことをまとめたり、発表し合ったりした。

・第７、８時　（９月 26 日　３～４校時）

信州大学の本間喜子先生から、災害が起きたときに何が起こるのか、またその際にどのように行動すればよいかなどについてお話を伺い、「マイ・タイムライン」の必要性や書き方について教えていただきながら、先生と一緒に「マイ・タイムライン」を作成した。

・第９時　（９月 30 日　２校時）

完成した「マイ・タイムライン」を数名の子ども達が発表し、友達から意見をもらったり、本間喜子先生から講評をいただいたりした。

最後には、この学習を通して感じたことを発表し合った。

【完成したマイ・タイムライン】

【学習後の子ども達の感想まとめ】

ア　災害時にマイ・タイムラインが役立つと実感した子

・「マイ・タイムライン」は災害時にとても役立つと感じた。

・本当に災害が起きたら、自分が作った通りに行動すればいいとわかった。

・マイ・タイムラインがあると、迷わず避難場所に行けるのが便利だと思った。

イ　災害時の備えの大切さに気づいた子

・家では避難の準備をしていないと思っていたので、リュックや水、食料などを用意することの大切さを初めて知った。

・キャンプ道具が避難グッズになるとは思っていなかったので驚いた。

ウ　避難のタイミングや行動を考えるようになった子

・焦らずに、年配の人もいるのでレベル２の段階で避難を始めたい。

・大雨になると前が見えなくなったり、声が聞こえなくなったりするので、傘や杖を持って避難した方がいいと思った。

エ　防災意識が変化し、今後の行動を考えた子

・初めてマイ・タイムラインを作って、意識が大きく変わった。

・作ったマイ・タイムラインやハザードマップを１年ごとに見返したい。

・もっと防災について知りたいと思った。

オ　自然災害の怖さを実感した子

・雨を甘く見ていたが、１時間で 50 センチも降ると街が浸水することに驚いた。

・川の水や土砂崩れの怖さも学べて、自然の力は怖いと感じた。

カ　学習を通しての気づきを持った子

・みんなのマイ・タイムラインが自分と全然違っていて驚いた。

4　事業の成果および今後の課題

【事業の成果】「マイ・タイムライン」の作成を通して、「災害時に役立つと実感した」「備えの大切さに気づいた」「避難のタイミングや行動を考えるようになった」「防災意識が変化した」「自然災害の怖さを実感した」など、児童は自分の生活と結びつけながら主体的に学び、防災への理解を深めていたことが、本学習の大きな成果である。

【今後の課題】４年生で作成した「マイ・タイムライン」を、６年生時に見直し、成長に応じた防災意識の深化を図りたい。また、今後も共和小の４年生が継続して取り組める体制を整えていきたい。

5　まとめ

本学習を通して、自分の生活と結びつけながら災害時の行動を具体的に考え、主体的に学習に取り組む児童の姿が多く見られた。避難のタイミングや備えの重要性、自然災害の恐ろしさに気づき、防災への理解を深めていた。防災を自分ごととして捉え、「自分や家族の命を守るにはどうすればよいか」を真剣に考え、行動につなげようとする姿勢が育まれており、学びを通して子ども達の成長を感じることができた。

（文責　教諭　川戸　国広）

学校安全総合事業の取組について

－災害を自分ごとと捉え、自ら学び進める子どもの育成を目指した地域防災学習－

長野市立信里小学校

1　はじめに

信里小学校は長野市南部にそびえる茶臼山の山腹、標高 667.6mに位置する。信里地区は行政連絡区が 15 カ所に散在した農村地帯であり、面積 13.42 ㎢。山地だが、肥沃な土壌に恵まれ雨水や沢水を利用した溜池が多くその数は 469。水田が多く、リンゴを中心に果樹や野菜栽培も盛んである。戦後の昭和 22 年の人口 3217 人、571 世帯をピークに人口は減少を続け、令和７年は人口 999 人、小学校児童数は今年度 31 名である。

信里小学校が位置する茶臼山は、かつて大規模な地滑りが発生し、現在も防止対策が続けられているが、近年は温暖化起因の集中豪雨が全国で多発しており、土砂災害の危険が高く、溜池も多い信里地区は常に危険と隣り合わせの状況であり、災害への備えは必須である。

2　信里小学校の防災教育の取組

昨年度は開校 150 周年記念行事のため開催を見送ったが、本校では例年、保護者や地域の方と防災に関して学ぶ機会（平成 30 年度から９月の土曜参観日に合わせて「地域防災教室」として実施）を設けており、本支援事業への参加は 11 年目となる。これまでに信里地域委員会（住民自治協の組織）と連携し、主に以下のような内容に取り組んできた。

平成 26 年度	「子どもがつくる防災マップ」
平成 27 年度	「茶臼山地滑り災害から学ぶ～現地学習～」
平成 28 年度	「村山方面の土石流災害から学ぶ」「災害時行動マップ作成」
平成 29 年度	「気象災害から命を守る～積乱雲に気をつけて～」
平成 30 年度	「避難所体験・防災グッズづくり」
令和元年度	「地区内の災害発生危険箇所確認と地区第一次避難場所の確認」
令和２年度	「避難所体験（ダンボールベッド、仮設簡易トイレ、非常食試食　等)」
令和３年度	「我が家のマイタイムラインづくり」
令和４年度	「防災マップ作りに向けて～地域の危険箇所、安全施設～」
令和５年度	「校内の安全設備を見つけよう～縦割り班スタンプラリー～」
〃	「防災マップ作りに向けて～第一避難場所までの危険箇所を知る～」
令和６年度	150 周年記念式典を行ったため、実施なし

3　今年度の「地域防災学習」での取組

昨年度より長野市では、児童の非認知能力（数字では表せない力）の育成に重点を置いている。本校でも研究テーマを「『好き』や『とくい』を見つけ、自ら学び進める子どもの育成～体験活動や生活経験を生かして～」とし、主体的、探究的に学ぶ児童の育成を目指している。そこで、今回の地域防災教室は児童が自然災害の危険を自分ごととしてとらえ、児童中心に学びを進めていけるものにしたいと考えた。また、本校は災害時避難所に

指定されているものの、万が一の事態の場合、道路が寸断され、市の職員は到着困難になる可能性が大いにあり得る。そのような場合に備え、職員と児童・保護者を含む地域住民が避難所設営や運営について学ぶことは必要不可欠であると考える。そのような理由から日本赤十字社長野県支部の方を講師に迎え「避難所開設ゲーム」を体験することにした。

4　今年度の地域防災教室を行う上で配慮した点

(1) 発達段階を考慮し１・２年生は「ぼうさいまちさがし　きけんはっけん！ゲーム」を行い、災害時に自分の命を守るためのよりよい行動を学べるようにする。

(2) 最初に日本赤十字社長野県支部の方に「災害の恐ろしさや避難所生活の苦労」等について講話をしていただき、災害や避難所について理解を深め、災害を自分ごととしてとらえ、その後のグループ学習に臨めるようにする。

(3) グルーピングは地区が同じ大人と児童

とし、万が一の事態が起きた場合における近所の方との連携を考えられるようにする。

(4) 児童主体の学びとなるよう学校側の意図を保護者や地域の方に説明し、児童が判断に迷っている時にアドバイスするというスタンスで参加してもらう。

5　当日について

(1) 日程

８：40～　８：45　始めの会　（・児童代表あいさつ　・講師紹介）

８：45～　９：40　災害、避難所生活についての講話（全体学習）

９：55～　11：20　グループ学習、感想発表等

(2) 講　師　日本赤十字社長野県支部　堀込明紀さん、水出秀子さん、山岸敦子さん

(3) 参加者　児童 30 名　学校職員９名　保護者や児童の家族・親戚 35 名

地域住民 13 名（地域委員会正副会長、区長　等）　　計　87 名

(4) 学校防災アドバイザーによる災害に関する講話（全体学習）の様子から

真剣に講話に耳を傾ける参加者

「シェイクアウト」の姿勢を体験

令和６年１月１日に発生した能登半島地震で被害を受けた地域の様子や令和元年 10 月に発生した「猪の満水」時に避難所となった豊野東小学校の様子を実際の映像で見た。想像していた以上に倒壊した建物や家屋の状態が酷いものだったことや、人で溢れる避難所の様子に参加者が驚きの表情を見せていた。また、避難所ではＴ（トイレ）・Ｋ（キッチン）・Ｂ（ベッド）に馴染めないことで死期を早めてしまう場合があることやプライバシーが守られない環境で精神的に追い込まれてしまう人も多いために、災害そのものによる死者数よりも災害関連死者数が多くなってしまったことを知り、衝撃を受けた参加者が多かった。震度６強クラスの地震が起きた場合、リビングや寝室でどのようなことが起きる可能性があるのかを検証した実験映像もあり、大人はもちろ

ん、子どもたちも十分に地震の恐ろしさを理解できた。地震が起きた時に命を守るための姿勢「シェイクアウト（まず低く・頭を守り・動かない）」を実際にやってみたり、災害時の正しい対応についてクイズ形式で紹介してもらったりし、１時間近くの講話だったが１年生児童も集中力を切らさず参加し、その後のグループ学習への主体的な参加につながった。ある保護者からは、過去に簡易トイレが避難所に届くまで２ヵ月かかった事例があったことで「家に帰ってすぐに災害に対する備えについて家族でしっかり考えたい。」という声が聞かれた。

【保護者や地域の方の感想より】
・映像を見てとてもこわかったけれど、とても勉強になってよかったです。（３年生）
・幸いにも大きな災害に直面したことがないので、防災バッグなどの準備を怠っていましたが、まずは非常食などから家にためておくのもよいと思いました。（保護者）
・災害はいつ起きてもおかしくないのにどこか他人ごとのような気がしていましたが、今日の講話からより身近に感じることができました。（保護者）

(5) 学校防災アドバイザーとのグループ学習の様子から

１・２年生は保護者と児童が混ざった６人程度の３グループに分かれ「ぼうさい　まちがいさがし　きけんはっけん！ゲーム」の「地震の場合」と「風水害の場合」に取り組んだ。どの児童も「まず自分の命を守る」「できるだけ急いで逃げる」という知識はあったものの実際地震が起こった際、棚やピアノ近くに隠れている児童の行動については「正しい」と判断し、ホワイトボードマーカーでイラストに〇をつけていた。１・２年生にとって棚や本棚、ピアノなど大きくて重いものは地震が起きても大丈夫という認識があることや、時計や蛍光灯のような物に関して、落ちてくる可能性があるという認識はしていないことがわかった。学校職員や保護者が日頃から身を守る方法を正しく、繰り返し指導する必要があることを強く感じさせられた。

保護者と一緒に「ぼうさい　まちがいさがし」に取り組む１・２年生

風水害から身を守る方法については、どこにでも当たり前に見られる看板が、実は落ちてくる可能性があり、逃げる時には近くを通らないようにすることが大切であることや、川や海からの「遠さ」よりも「高さ」を考えて避難することが大切であること、さらに、傘を差すことは逆に危険なことや頭上だけでなくマンホールや用水路といった足元にあるものにも注意する必要があることを知り、とても有意義な学習となった。

３～６年生は、同じまたは近い地区に住む児童・保護者・地域の方同士で８グループを作成し、３教室に分かれて「避難所開設ゲーム」を行った。それぞれの教室に日本赤十字社長野県支部の方に講師として入っていただき、やり方の説明後、机上に広げた避難所の平面図を見ながら最初にストーブ４台とゴミ箱の設置場所を考えた。リーダーを任された５・６年生は困惑した表情を見せていたが、下級生のアイディアや保護者からのアドバイスを聞き、悩みながらも設置場所を決めていった。絶え間なく避難者が訪れる状況を想定する指示カードは 70 枚もあったため、時間との戦いだったが「正解はないから、自分の判断でやっ

悩みながらゲームを進める子どもたち

てみよう。」という講師の方からの声にも励まされ、時間が進むにつれてリーダー中心に子どもたちだけでどの避難者にどこのスペースを提供するか判断していくようになった。救援物資の置き場所や簡易トイレ設置場所を決めるような特別なカードが出た時だけは大人が「雨が当たらなくてみんながとりに行きやすい場所がいいよ。」「水のある場所の近くにしよう。」といった児童の判断の手がかりとなる適切なアドバイスがあった。リーダーの中には「インフルエンザの人やペット連れの人は感染やアレルギーのことを考えて離れた場所にした。」「赤ちゃんを連れた人や外国の人は困ったことがあったらすぐに言えるように本部の近くにした。」と自分の判断の根拠をすすんで語る児童が見られた。

身を乗り出してゲームに取り組む５年生

　ゲームをふり返る場面で、講師の方から「避難者に看護師さんがいましたが、みなさんはどこのスペースを提供しましたか？」という問いがけがあった。どのグループも「看護師」という理由で既往症がある高齢者や体調が悪い方の近くのスペースを提供していたが「看護師といっても被災者にかわりはない。その方の気持ちを考えることを忘れないでください。」という言葉に参加者の多くが深く考えさせられた。

【児童の感想より】
- ひなん所にたくさんの人を入れるのが大変でした。どこにだれを入れるのか頭を使って考えながらやりました。（３年生）
- ペットがいたり、病気だったりと人それぞれの状況と、トイレが流れなくなったり、ゴミ捨て場が必要だったりという避難所特有の状況があり、その状況に合わせて協力して動くことがとても大切だと分かりました。（５年生）
- ストーブを置く場所に迷った。いろいろな人の事情がある中で、どこにどの人を送るのかを考えられて勉強になった。（６年生）
- 避難所には様々な年齢や事情がある人が次々に訪れるので、振り分ける判断力や迅速な対応が求められ大変だと感じた。リーダーとなる人や気を利かせて人々の気持ちを汲んで動かしていける人がいるとよいと思う。いろんな人と助け合い、協力していこうとする気持ちがとても大切になってきそうだと予想がつきました。（保護者）

６　事業の成果と今後に向けて

「避難所開設ゲームは児童には難しすぎるのでは…。」と不安だったが、真剣にゲームに取り組む姿から、児童が災害について自分ごととしてとらえ、主体的に学ぶ良い機会になったと感じた。保護者や地域の方に学校側の意図を理解して参加してもらったことがとても有効だったと思う。児童からは「感染症にかかっている人やペットを連れている人をどうするかがとても迷った」「看護師さんも被災者の一人であることを忘れないでと教えてもらったことが心に残った」といった言葉が聞かれ、避難所では常に周りの方に心を寄せる必要があることを学ぶことができた。防災アドバイザーの廣内大助先生からは、日赤奉仕団の方の協力を得て、具体物を使った避難所体験をするといった、より児童の主体的な防災学習となる発展のさせ方についてアドバイスをいただいた。今後も地域の方々と十分に対話し、連携して価値ある地域防災教室にしていきたい。また、例年行っている避難訓練を「児童が主体的に判断し、自分の命を自分で守る力を育むための訓練」になるよう内容を変えていこうと思う。　　（文責　教頭　髙橋　俊）

学校安全総合支援事業の取組について

―塩崎地区の水害から防災について考えよう―

長野市立塩崎小学校

１　はじめに

塩崎小学校は、長野市の南部にあり、ＪＲ稲荷山駅の東側に位置する、全校児童 198 名の中規模校である。昨年度から信更地区の児童も通うようになり、学区は、信更地区と、塩崎地区の北東の東篠ノ井地区から南西の長谷・越地区までの約８㎞と大変広く、千曲川沿いに住宅や田畑が並んでいる。2019 年（令和元年）の台風 19 号では、千曲川及び岡田川の越水によって、児童宅を含む地域の住宅の一部に床下浸水等の被害があった。台風 19 号の被害から６年が経ち、当時の地域の様子を知る児童も少なくなってきているが、水害の被害に遭ったことを風化させず、防災についての児童の意識を高めたいと考え、本活動を実施した。ここでは、４学年での取組を紹介する。

２　本校の在校時における風水雪害・土砂災害発生時の対応

〈警報等〉　土砂災害警戒情報・記録的短時間大雨情報・大雪情報

(1) 災害発生危険度が高い場合

最新の気象情報や県河川・砂防情報ステーションを定期的に確認

県砂防情報ステーション　http://www.sabo-nagano.jp/res/portal.html

(2) 管理職等による緊急会議

(3) 校長（責任者）の指示事項及び対応

※気象情報に基づき、対応を決定する。なお、保護者引渡しは台風等爆風対応マニュアルに準ずる。

ア　災害発生の危険性が高まっている際は、担当者は、気象情報を定期的に確認する。

イ　土砂災害警戒情報、記録的短時間大雨情報、大雪警報が発令され、児童の下校に危険が想定される場合は、必ず学校待機とする。状況により、東校舎３階に避難する。

ウ　市町村防災部局から避難指示等があった際は、指定された避難所に避難する。避難所は事前に周知する。

エ　天候回復後、教職員が担当地区の通学路等の安全を確認し下校する。

(4) 留意点

・ハザードマップによると、塩崎小学校周辺は２～５ｍ、小学校東側は５ｍ以上の浸水深になる可能性がある。

・学区に聖川があり、用水路も多いので安全を確認する必要がある。

・気象庁によると、１時間に 20 ミリ以上の強い雨が降ると、小さな川や側溝があふれ、小規模の崖崩れが始まる可能性があるとしている。この場合、十分な注意が必要である。

・メールによる緊急通報システムを整備しておく。

・災害発生時は、児童の安否確認が急務である。さらに、家族・住居の被災状況等を早急に確認し、必要に応じケア対策を講じる。

3　学校防災アドバイザーとの関わり

(1) 事前打ち合わせ

９月４日　信州大学教授廣内大助先生と打ち合わせを行った。近隣の小学校の過去の実践例を教えていただき、子どもたちが調べる際には長野県・長野市・信州大学が共同で作成した「“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」のキッズページを活用することが有効であることや、児童が長野市で起こった災害について概要などを知るだけでなく、「自分ごと」として捉え、家庭や自らの防災意識を高めていくことができるような学習にすることが重要であることを教えていただいた。

(2) 猪の満水についての概要説明

11 月 11 日　廣内大助先生に児童に向けて「猪の満水」の概要や災害デジタルアーカイブの紹介をしていただいた。児童は、被害のあった場所の写真を見た時に「怖い」「長野県で実際にこのようなことがあったなんて信じられない」と言っていた。また、災害デジタルアーカイブを使って調べていくことに意欲が高まっていた。

(3) “猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ視聴

ア　視聴内容

「“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」では、豪雨災害の写真、動画、被災者インタビューを視聴した。特に、被災者の語りは、災害発生時の葛藤、恐怖、迷い、そして後悔を伴う生の声として非常に示唆に富んでいた。児童は、塩崎地区の方のお話を視聴し、被害の様子を写した写真を見て、日頃から見ている聖川の水が越水したことに驚き、洪水の恐ろしさや日常の備えの重要性について感じていた。

イ　教育的意義

アーカイブ資料は、単に「怖さを伝える教材」ではなく、以下３点の災害の本質を伝える教材であると感じた。

・判断の遅れが命に直結すること
・日常の危機意識の差が避難行動に影響を与えること
・正しい情報の入手がいかに難しいかということ

特に印象的だった証言として、「避難したほうがいいと思ったが、近所の人が動かなかったので様子を見てしまった。」「半鐘が鳴るまで避難しなかったので、避難するときは急いで家から出たため帽子とタオルしか持っていなかった。」という言葉があった。児童はこの証言に対し、「前もって必要なものを用意しておくことが大切。」「周りが避難していないから大丈夫だと思っていると危ない。」などと呟いていた。この証言は、児童が災害発生時の行動について考えるきっかけとなり、災害時における「同調バイアス」や「正常性バイアス」を理解する学習にもつながった。

ウ　教科横断的な視点

災害デジタルアーカイブによる視覚的・聴覚的な情報は児童の興味を引くだけでなく、社会科の防災学習・道徳の生命尊重の学習・国語科の話し言葉の記録を読み解

く活動（聞き取りメモの工夫）など、教科横断的な活用が期待できると感じた。

本活動では国語の単元「もしものときにそなえよう」で洪水が起こりそうな時に備えて何をすればいいのかについてデジタルアーカイブで調べたことを用いて作文を書く活動をした。災害デジタルアーカイブで視聴した証言や、タブレット端末を使用して得た情報などから、災害に備えて大切だと思うことを考えていた。児童の作文には、「大雨が予想されるときには、事前に防災バックなどを準備し、避難しやすいうちに避難を開始することが大切だと考える。」などと書かれていた。教科横断的な視点で防災について考えることで、防災について多面的に考えることができた。

(4) 防災倉庫見学

ア　見学の概要

塩崎小学校校庭に設置してある長野市防災倉庫はどうなっているのか予想し、物品の種類や配置を班ごとに調べた。

イ　気づき

防災倉庫には、非常食、水、毛布、簡易トイレ、ヘルメット、リアカー、浄水器、燃料、などが整然と配置されていることに気づき、特に児童が注目していたのは、非常食の賞味期限が事前に予想していた４年程度ではなく、18 年という点で非常に長く感じていた。また、予想していたよりも物資の量が少ないと感じていた。

ウ　「公助」から「自助」へ

倉庫見学は、災害対応の裏側を知る絶好の教材となった。見学後、「もし賞味期限などを把握していなかったら災害が起きた時にどのような課題が起きるか」「物資が足りなくなった場合、どのように優先順位をつけるか」といった教師の問いかけから、児童は「自分で必要なものを用意しないといけない。」「防災倉庫にないものは自分が持って行かないとない。」と発言し、市が用意している「公助」の視点を学んだことで、一方で自分にできることは何か、災害に備えてどのような準備ができるのかといった「自助」の視点につなげることができた。

(5) マイ・タイムラインの作成

ア　作成のプロセス

マイ・タイムラインでは、大雨による河川氾濫を想定し、平常時に行うこと・注意報段階で確認すること・警報や避難情報発表時の行動・発災後の対応の４段階に分けて行動を整理した。

イ　課題の把握

マイ・タイムラインを作る上で、事前に避難する場所を家族で決めていない・避難開始の明確な基準を決めていない・防災バックを用意していないなどの課題が浮き彫りとなった。

特に、警報のどのレベルを「避難開始」とするかを決めていないと、災害時に判断が遅れる可能性がある。これを家族で共通理解しておくことの重要性を再認識した。

ウ　自分ごととしての意識の深まり

「猪の満水」で実際に床下浸水の被害が出た地区に住んでいる児童は、班の中で発表する際に「私の住んでいるところは（当時）水が来たため、注意報段階で（あることを）確認して避難を始めないといけない。」と発表した。また、「僕はおじいちゃんおばあちゃんと住んでいるから、早めに逃げないと人数が多くて避難に時間がかかる。だから僕は警報・避難情報が出たらすぐに避難する。」と言っていた。マイ・タイムラインを作成し、児童間で発表することは、調べたことや映像などから感じたことを、より自分の生活の実態に当てはめて考えることができ、防災について自分ごととして考えることができた。

４　事業の成果及び今後の課題

今回の学習を通して、災害教育における三つのキーワード「①自助、②共助、③公助」が互いに密接に結びついていることを児童と確認することができた。

・防災倉庫の整備（公助）は、地域住民の理解と協力（共助）なくして機能しない。
・市が用意している（公助）の視点を学んだことで、（自助）の視点につなげることができた。
・被災者の証言は、自分ごととして災害を捉える意識づくり（自助）につながる。
・マイ・タイムラインは、自らの避難（自助）の強化だけでなく、家族間の連携（共助）の充実にもつながる。

そして、児童が自分ごととして考えるためには、三つのキーワードをより具体的に考え、実際の生活に当てはめることが重要だと考えた。また、防災教育を年間指導計画の中で「継続的かつ実践的に学ぶ」体系として位置づけることの重要性を改めて感じた。

今後の課題として以下の４点が挙げられる。

・地域との連携強化：倉庫見学や防災士の講話など、学校外の専門性を積極的に活用する。
・探究的な学習への発展：児童自身が「地域の防災課題」を調査・提案する活動へ広げる。
・家庭との連携：マイ・タイムラインや非常持ち出し袋の点検などを家庭学習や自主学習として取り入れる。
・ＩＣＴの活用：デジタルアーカイブやシミュレーション教材を組み合わせてよりリアルに感じるようにする。

これらを通じて、災害時に自ら判断し、行動できる児童の育成を目指したい。

（文責　教諭　高橋　江成）